

タリタ・クム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第13号

2009年12月20日

〒162-0805

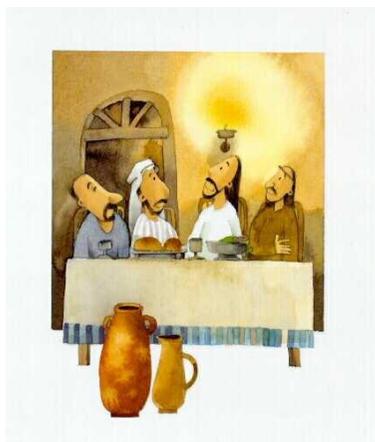
東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者：大岡左代子



「私はあなたがたを友と呼ぶ。」

(ヨハネ 15:15)

マリア 景山恭子

(聖公会神学院スピリチュアルディレクター)

私がケビンに初めて会ったのは1984年に通い始めたニューヨーク市内の教会でした。ケビンはユーモアに富んだアイルランド系アメリカ人で、60代半ばの、小柄な男性でした。初めて会った日から、とても気持ちよく親切に私たち夫婦に接してくれました。「1度も結婚したことの無い独身男性」でした。その年から毎年クリスマスレターを送ってくれるようになりました。笑い転げるような話の後に神さまへの賛美と主の降誕を喜ぶ信仰が美しい言葉で綴られている彼からのクリスマスレター。長い間、彼の名前だけで来ていたクリスマスレターにある年、パットという男性の名が載るようになりました。そしてふたりの写真も載るようになっていきます。私はケビンとパットが40年以上もアパートのひと部屋と一緒に生活し、ゲイのカップルであったことを知りました。クリスマスレターをふたりの名前で、そして写真も載せようと彼らが決心をするまでの40年はなんと長い年月であったことでしょうか。40年以上も深い愛情で心も体も結び合わされていたふたりが、その結びつきを公にするまでの間の苦悩はどんなで

あったでしょうか。パットが老いてとても弱ってきた時にふたりでケアつきのホームに移り住み、そのホームからもユーモアあふれるクリスマスレターを送って来ていましたが、ケ빈はパットが天に召された後、まるで生きる希望を失ったように弱り、最愛のパットの後を追いかけるように旅立ってしまいました。電動タイプライターで几帳面に封筒の上に住所が打たれたケ빈からの手紙は、クリスマスが近づいても再び私のもとに届くことはなくなりました。

もうひとり私の友人W司祭は、いつも一緒に行動している若いカメラマンが彼のパートナーでした。「仲良しさん」か、と思っていた私が彼らは長年のカップルであったことを知ったのは、そのパートナーが難病に侵されてからでした。彼が天に召されるまでのW司祭の献身ぶりは、とても言葉で表すことはできません。尽くして、尽くして、可能な限りの世話と治療の機会をパートナーに与えていました。私はオープンゲイの司祭が主教に按手されたことで、アメリカ聖公会が多くの敵を作ってしまったことをとても寂しく思います。共同体を大切にすることと、ひとりの存在を大切にすることのバランスは、なんとむずかしいことかと思ひ戸惑います。ゲイであるから選ばれたのではなく、素晴らしいリーダーであり、素晴らしい司祭であるから選ばれたのであり、聖霊の働きを祈って投票した結果のことであり、それは聖霊の働きなのです、とある女性の補佐主教は言いました。彼女は、ニューヨーク教区のゲイ／レスビアンパレードに聖公会の旗を持って毎年歩きます。彼女自身はゲイではありませんが、ゲイの人たちのパートナーとの結びつきの濃さ、誠実さを知っているのです。そして、性指向のゆえに苦しんでいる人たち、悲しんでいる人たちと連帯しようと努力しています。ひとりの人間の性指向を否定することは、その人の存在そのものを否定することになってしまいます。「私はあなたがたを友と呼ぶ」とイエスさまは言われました。私たちの1部を除外してではなく、そのままを抱えこんでイエスさまは「友」と呼んでくださる、そのことを感謝して心に深く刻みたいと思います。



私はカナンの女です。(マタイ 15 : 21~28)

バク ミヒョン
司祭 ドミニカ 朴美賢

(大韓聖公会 釜山教区から東京教区へ派遣
/聖愛教会協力牧師)

私は日本で韓国人として生きて行くカナンの女です。

私は異邦人で、女です。

日本で、異邦人で、女として生きて行くのには時々気が詰まります。「外国人入国審査で指紋採取と顔写真撮影」のようなことがそうです。

交通の発達により、過去とは違って、国と国、大陸と大陸を出入りする速度が速くなり、文化と文化との接触も頻繁になっています。最近の世界の関心である新型インフルエンザの例から見ても分かるように、昨日地球の反対で起きた痛みと苦難は、今日私たちが住むこの国にも起きます。この観点から見ると、地球は一つの共同体であることが深く感じられます。それで、今の時代は、多様な社会構成員は共合して、一つの共同体になることは、代表的な多文化社会であるアメリカだけの問題ではなく、世界すべての国に求められていることです。このような時代で、「外国人入国審査で指紋採取と顔写真撮影」を要求することは気が詰まって言葉も出ないことです。それはまさに差別であり、人権侵害であります。

万一、この様な気が詰る現実に私たち大人が口を開かないならば、私達の子どもが悪霊にひどく苦しめられることになります。カナンの女の「娘が悪霊にひどく苦しめられています」という叫びはすぐ私たちの叫びになるはずです。いや、既に私たちは気が詰まってしまいました。すぐ、完全に魂がなくなるかも知れません。

ですから、

私が完全に魂が無くなる前に

私の息子が悪霊にひどく苦しめられる前に

悪霊にひどく苦しめられている多くの娘たちのために

イエス様に向かって叫びます。

「主よ、わたしを憐れんでください。」

イエス様は話してくださいます。

「あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」

私はイエス様のみ言葉を信じます。

そして、日本人が私の友であることを信じます。

そして、友である日本人と私が一つになって、

イエス様に叫ぶことを信じます。

「主よ、わたしを憐れんでください。」



■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ② ■ ■ ■ 司祭 後藤香織(中部教区)

～思い込みによるジェンダー投影～

「お前のどこが女なんだ」。「香織って女らしいよね」。この2つの言葉は、どちらも私が身近な人達から言われる言葉です。

私を男の時から知っている方々は、私に対する「男」というイメージを払拭することはどうしても出来ないようで、今でも時々「女だとは到底思えないな」と言われます。昔はそう言われるのは、「まだまだ私の女としての自覚が、努力が足りないからだ」などと考え、女性のジェンダーを身に着けよう、もっと女らしく振る舞おうと、一生懸命に努力したものでした。

ところが不思議なことに、同じ時期に私が「男」だったことを知らない友人がずいぶん増えて来ていたのですが、その人達からは、「女らしいよね」と言われることはあっても、決して男っぽいなどとはいわれることはないのです。

初めから、私を「女」と認識している人達の中では、無理に女らしくしなくても、反対に多少男っぽく振る舞っても、「男」だとは決して思われないのです。

私が体験しているこの不思議な出来事は、私たちが人の「女らしさ」や「男らしさ」を、相手の性別に合うように、わざわざ選択して見つけ出し、その人に投影して、「女らしい」「男らしい」と判断していることの表れなのです。この偏見は、私自身なかなか克服するのが難しく、どうしてもトランスジェンダーの友人たちの中に、体の性別に従ったジェンダーを投影してしまいがちです。周りの人たちが誰も気がつかないのに、私はトランスジェンダーの人に気づき、その人の振るまいが気になってしまうのは、その現れかもしれません。

「いや～そんなことは無い。お前は自分の努力不足を人のせいにしてている！」と思っていらっしゃる、あなた。実は、目の中の丸太に気がつかないでいるのかもしれないよ。

身近な人への「あの人はホント女性らしいな～」と、いう感じ方が実は思い込みかもしれないと一度疑って見ることをお勧めします。それがきっかけで、自分の目から丸太を取り除くことが出来、はっきりと人が見えるようになるかもしれません。

公開学習会 セクシュアル・マイノリティの声に聴く



わたしの瞳にうつる風景 ～性同一性障がい者の声～

松原恵美子(ジェンダープロジェクトメンバー/大阪教区)

8月22日(土)午後1時30分より、大阪聖パウロ教会にてジェンダープロジェクト主催、女性デスク、管区人権担当、大阪教区宣教部、京都教区宣教局社会部、中部教区宣教局共催で公開学習会を行いました。さまざまな教区や教団の方、講演者の友人など53名の出席でした。

学習会は、まず後藤香織司祭から、用語説明がありましたが、8月22日限り有効ということでした。言葉の解釈のされ方はその時々によって変わるし、人によっての考え方も違う、辞書のように、この言葉はこういう意味という限定ではないということを知りました。それだけに、言葉の使い方の難しさや、誤解が生じるであろうことを考えさせられました。

続いてAさんの講演。Aさんは女性として生まれ育ちますが、子どもの頃から女であることに違和感があり、成長するにつれ自分の身体や高い声に対して嫌悪感をもち、家も学校も何処にいても、人の頭の中でさえも“男”と“女”にカテゴライズされた世の中に自分自身の居場所がないという経験をされます。その内、自分は男でも女でもどちらでもない。自分は自分、Aなんだと思うことで、自分の居場所をつくったのだそうです。中にはその環境に苦しみ、身体を傷つけたり自殺をしてしまう人もいます。30代になり大阪に来て、いろいろな人と出会う中で、自分と似た境遇の人にも出会い、「自分もこの世の中に生きていいのだ」と思えるようになったそうです。そして治療を経て戸籍の性別も変え、現在に至っているというお話でした。

お話の中に、親友やご両親にカミングアウトをしたときのお話が出てきました。親友には、「何か変わるの？見た目が変わっても中身まで変わるわけじゃないでしょ!？」と言われ、勇気が持てた。お母さんには「ごめんね」とずっと謝り続けられたけど、最近は「あなたの人生だから」と言ってもらえ、少しずつ理解をしようと努力してくれているのが分かる。「自分は女の子に生まれてきたけど、今は自分の生き方をしているから幸せなんだ」ということをこれからの人生を通して見てもらうことが大切だと思っている。

休憩をはさんで、後藤司祭の講演。もともとカミングアウトするつもりはなかったけれど、中部教区の教役者会の中で、ランベス会議で同性愛者のことが問題になっている話になったときに「日本にはいないだろう」との発言があり、そのことについて考えよう、学習しようとはならなかった。教会の中にもセクシュアル・マイノリティはいるんだという思いがこみ上げ、「自分はトランスジェンダーだ」とカミングアウトしてしまった。結婚されているパートナーも初めは戸惑ったけれど、現在は理解してくれている。子どもたちも「パパ」から「チッチ」と呼び方が変わった。勤務していた教会の保育園の理事会で問題になったけれど隠さずに話したこと、教会の中ではなかなか理解を得られないこともあったけれど、一生懸命に働くことによって理解を得られるようになった、

今まで黙っているしかなかった他の教会、教区の人たちから連絡をもらったこと、そんなお話が続きます。もちろん理解者ばかりでなく抗議の電話、手紙、性的少数者を排除する内容のブログもあり、めげそうになることもあるけれど、自分だけでなく信徒の方のほうが辛い思いをしている、批判するにしても、状況をわかってほしい、悩みながら信仰生活をおくっている信徒のかたのこともわかってほしいとおっしゃっていました。

また、ご自身の生い立ちから聖職を志すようになったいきさつ、もともと東北教区の聖職候補生だったのに、中部教区の聖職になったいきさつなどが語られました。

女性の姿になられた後、子どもたちがかわいそうだ、わがままだなどの声もあるけれども、お子さんたちは、「チッチが悪いんじゃない、そういうことを言う人たちが悪いんだ」と言ってくれるそうです。

最後に教会で「同性愛がだめだ」、「わがままするのはどうなんだ」と言われると、セクシュアル・マイノリティの人は自分を肯定できず、教会を去り、病気になってしまうこともある。教会は命を光輝させることができる場なので、セクシュアル・マイノリティの人もその場を与えられたいと思っているとおっしゃっていました。

その後、休憩時間中に質問用紙にかいてもらった質問にいくつか応じていただきました。お二人は自分のストーリーを語ってくださいました。あたりまえのことですが、みんなにそれぞれのストーリーがあるように、セクシュアル・マイノリティの方にもそれぞれのストーリーがあります。そのストーリーを私たち（教会）が排除している現実があり、私たち（教会）は誰と共に生きるのかということについて、改めて考えさせられました。

私は以前、男女二分法に関して何にも疑問に思っていませんでした。10年前にある人権セミナーの実行委員をやったときに、申込み用紙に性別に○をする欄があるのはどうかということで議論になりました。そのとき、すでにトランスジェンダーの人と出会っていたにも関わらず、何が問題なのか、最初よくわかっていませんでした。その中であるメンバーがどちらにも○ができない人もいる、この欄があることによって、人権セミナーなのに、人を苦しめることになる、ということをおっしゃり、ようやく問題が見えてきました。そのときに、偏見をもっているつもりはなくても、無知、鈍感なことによって人を傷つけることは起こることに気づきました。あらためて周りを見たら、私たちの周りには、男女二分法ばかり。また、そのことに疑問をもたず、あたりまえになっていることがとても多いと思います。教会が、悩んでいる人と共に生きようとするのはあたりまえのことです。でも残念ながら、そのあたりまえができていない現状があることを私たちは知り、考え、行動しなければいけないのではないのでしょうか。私たちは、今回の学習会を通して、まず、知ること、出会うということを経験できたと思いました。

講演に先立ち、司会者から「ジェンダープロジェクトでは『女性』は性別の女性だけでなく社会の中で生きにくくされている少数者、マイノリティである人たちの総称の1つととらえて活動している」との説明がありました。（タリタ・クムにも書いています）ジェンダープロジェクトでは、これからも少しでも多くの人と一緒に考える一つの機会としての学習会を開催していきたいと考えています。次回の日程、場所等は未定ですが、今後とも活動へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



日本聖公会宣教 150 周年記念プログラムの報告

西原美香子

(150 周年プログラム実行委員会メンバー「夕の祈り」担当
/中部教区岡谷聖バルナバ教会信徒)

日本聖公会宣教 150 周年記念のプログラムが 9 月 22 日に、大礼拝が翌 23 日に、それぞれ立教大学池袋キャンパスとカトリックのマリア大聖堂にて行われました。記念礼拝についてはすでに『管区事務所だより』で報告されていますので、ここでは米国聖公会のキャサリン・ジェファーツ・ショーリ総裁主教を説教者として迎えた 22 日の「夕の祈り」について報告いたします。

「夕の祈り」の企画のこの発端は、ジェンダープロジェクトの話し合いにありました。今年のはじめ 150 周年プログラム実行委員会（以下、実行委員会）が発足し、全国のさまざまな宣教の業を分かち合い、人々の交流を深めようと企画内容の検討に入りました。日本聖公会の宣教 150 年の歴史を振り返ると、多くの女性の伝道師や女性信徒たちが宣教の担い手となっていたにもかかわらず、名前は記録されていません。そこで「ジェンダーの視点から祈りの時をもつことはできないだろうか。」「大礼拝の前日に夕の礼拝を行おう」「できれば女性主教を迎えたい」とジェンダープロジェクトより実行委員会に提案した次第です。この提案に対して実行委員会では合意を得ましたが、「女性たちだけで行うような礼拝にならないこと」「日本聖公会『祈祷書』に基づいた式文であること」と、他からいろいろな声が寄せられました。

6 月に準備をスタートさせました。準備グループのメンバーは 13 名。そのほとんどは女性の司祭や信徒でしたが、理解ある男性司祭たちにも入っていただき、「夕の祈り」の位置づけについて話し合いました。先ほどの声も分かち合いました。その結果、「夕の祈り」が「3 日の宣教 150 周年記念大礼拝を前に、国内外より集って交流できたことを感謝する祈りの場」「日本聖公会の宣教の歩みを静かに振り返り、宣教を担ってきたすべての人々の働きに思いを馳せる時」「今後の宣教の歩みが、多様なものを包み込み、主にあって一つである喜びに満ちたものとなるように、祈りもとめる場」となるようにと、準備をすすめることにしました。1 ヶ月かけて完成した式文の言葉の一つひとつは「共に祈る」ということに心を尽くしたものでした。当日の式文より、招きの言葉をご紹介します。

「天地と歴史の主である神よ、
日本聖公会宣教150周年を祝うために
ここに集められたわたしたちを顧みてください。
この歴史の中で、
あなたがいつも変わらずともにいてくださることを知り、
あなたの恵みを受け、
あなたの愛を分かち合い、
あなたの命をお互いの中に見いだし、
歩み続けてきた兄弟姉妹の思いを、
今、わたしたちは心に刻みます。
そして、新たな希望に満ちあふれて送り出されることを、
この礼拝のはじめに祈ります。
わたしたちの主イエス・キリストによって アーメン」

祈りの場づくりにも思いを尽くしました。「夕の祈り」の会場となった立教大学のタッカーホールの舞台は、秋の自然をイメージして野の草花を籐籠に入れてアレンジしました。所々に新聞や世界の出来事を写した写真などがあったことにお気づきの方はいらっしやいましたか。自然の恵みの美しさや豊かさだけでなく、社会の出来事をおぼえて祈ろうという、担当者たちのアレンジでした。

女性デスクの尽力と管区渉外主事の協力で、米国聖公会 キャサリン・ジェファーツ・ショーリ総裁主教を説教者に迎えることができました。ショーリ主教の説教の全文は9~10ページに掲載いたしますので、是非ごらんになってください。ショーリ主教の説教でも、触れられていましたが、日本の占領と戦争の暴力への加担の歴史とその悔い改めについては、「夕の祈り」の最初の「映像と音楽による日本聖公会宣教150年の歩みとこれから」でも表現しました。150周年礼拝に招かれたアジア各国の聖公会のゲストたちとも「夕の祈り」を共にしたことを感謝したいと思います。

日本聖公会において女性の司祭按手が実現して10年がすぎた今年、米国聖公会の女性主教を説教者として迎えた「夕の祈り」が実現しました。そして翌150周年記念大礼拝では、日本で按手を受けた韓国人の金善姫執事による福音書の朗読の声が大聖堂に響いたこの出来事を、神さまに深く感謝したいと思います。

日本聖公会宣教 150 周年記念プログラム 夕の礼拝 米国聖公会 キャサリン・ジェファーツ・ショーリ総裁主教説教 エレミア31：8-9a、詩編103：1-6、マタイ5：1-10

今宵私たちは、日本聖公会宣教 150 周年を神に感謝するためここに集まっています。当時イギリス帝国の統治下のない地域で最初にこの管区が誕生したことにも感謝を捧げます。とはいえ、日本聖公会のルーツが実はアメリカ帝国主義にあることを、まず指摘したいと思います。1853 年～54 年ペリー提督が通商条約の締結を要求して来航した後、中国で活動していたアメリカ人宣教師が来日しました。神の働きは、平和や神聖さとは無関係の出来事から始まることもあるのです。

ウィリアムス師、リギンズ師、シュミット博士の 3 人の宣教師は中国から直接日本に入国し、医療や教育の分野で活動を始めました。そんな活動のひとつが現在この立教大学へと至っています。日本での積極的な宣教活動が許されるまでにはさらに数年が必要でした。しかし中国から来日したこれら宣教師たちの活動は、大変重要な意義を持っていました。19 世紀半ば、聖公会をはじめとする各教派の宣教活動は、植民地主義の色彩を弱め、活動する地域の独自性を重んじる (indigenize: 現地化する) 方向へ転換しつつあったのです。

これら 3 人の聖公会宣教師が来日したのと同時期、Henry Venn と Rufus Anderson が「宣教の現地化 (indigenizing ministry)」について論じ始めました。その目的は、自力で宣教する力を持つ自立した教会を各地に広めることであり、そのような教会のありかたこそ、国策が変化するその後数十年間の日本において、日本聖公会が存続するために不可欠な要素となりました。

現地化し自立した教会、自らの力で宣教できる教会、という理想は預言者エレミアの描くビジョン---あらゆる場所から、様々な立場の人が集まり、神によって、それら全ての家族・国々がひとつにされる---の実現を助けるでしょう。このビジョンはまだ実現していませんが、この地に蒔かれた種は、すでに芽を出し、実を結び始めています。キリストの体に属するすべての組織と同様、日本聖公会の使命は、天の国を映す地上の姿として、全世界の和解、すべての創造物の和解に向けて働くことです。

この働きに加わるための非常に適切なヒントが、マタイによる福音書の中に2つ記されています。山上の垂訓の最初と最後の部分は、心の貧しい人、および正義のために迫害される人に、天の国へとつながる祝福が与えられると書かれています。この2つの要素は、日本聖公会とその使命を特徴づけるものです。

日本聖公会は、占領と戦争の暴力への加担を悔い改めたことで、世界のキリスト教徒に、勇気ある手本を示しました。心の貧しい人にとって、傲慢や自己弁護は不要です。彼らはただ真実を語ります。たとえそれが痛みを伴い、恥ずべきものであっても。この真実を通して、道、真理、いのちを分かち合い、天の国の実現を目指すのです。日本聖公会の謝罪は、韓国聖公会にも大きな影響を与えました。日本聖公会の証（あかし）がなければ、TOPIK (Towards Peace in Korea) の取り組みは不可能だったでしょう。

二つ目の祝福は、義のために迫害される人々に与えられます。日本聖公会が、沖縄やアイヌのために活動していることは、必ずしも広く知られているわけではありませんが、これらの地域に、天の国の物差しをもたらしました。この活動を通して、皆様方も祝福されています。

現在日本聖公会が直面する課題は、これまでの150年間と同じです。いかに信仰の人、心の貧しい人、正義の人となるか-----これらの価値を必ずしも大切にしない文化の中において。自分の周りの社会を、天の国へと変えていけるかどうかは、19世紀の宣教師たちのように、この3つの価値を生きることができるかにかかっています。（彼らもまたこれらの価値を、使徒パウロから学びました。）地域に根ざす教会は、パチンコ店やアニメ、匿名の群衆があふれる都会で福音を語っていかなくてはなりません。しかし過去にそうであったように、日本聖公会は現代においても、それを成し遂げることができるでしょう。

皆さんの証は、他者、特に同じように世俗的・物質主義文化のなかで努力しているヨーロッパや北米の教会にとって参考になるでしょう。皆さんは私たちに何を教えて下さいますか？ 日本の良き地に育った種から、どのように福音を宣べ伝えますか？

(翻訳：高山絵美)

九州教区 湯布院でハラスメント防止研修会

佐藤 真理子

(久留米聖公会・九州教区ハラスメント相談窓口設置準備委員会委員)



「九州教区に準備委員会設置がなされる意味が理解できた」「他人事と思っていたことがいつでも身近におこるのだということ、そして学ぶことによって対処する心構えができるのではないかと思った」「組織上の問題点が見えてきました」

これは、今年8月29日～30日に大分県湯布院サレジアンシスターズ黙想の家で行われ

た初めての九州教区ハラスメント防止と相談のための研修会のアンケートに書かれた感想の一部です。

研修会は、講師に京都教区の井田泉司祭、管区女性デスクの木川田道子さん、ジェンダープロジェクトの大岡左代子さんを迎えて行いました。まず、木川田さん、大岡さんのワークショップは、緊張しきっていたわたしたちスタッフの心を和らげくださり、さすがだと感心しました。夜には、井田泉司祭によって、京都教区の前田文雄元牧師による少女への性的虐待事件の事実説明とこれまでの経過が示されました。

京都の事件で被害を受けた女性の子ども時代、そして成人になってその傷の大きさに今も苦しんでおられる被害者のことを思って、わたしたちは祈りました。ともに、祈ることで弱い立場にいる子どもや女性を被害にあわせてはならないと、強く決心することができました。聖餐式での代祷、そして祈りのことばを参加者みんな考えてささげることを通して、わたしたちの心を一つにすることができたように思えました。こんなことがあってはならないという決意を神様のもとで誓い、力を得ることができました。

また、九州教区のすべての教会から、必ず一人はこの研修会に参加していただきたいという主旨の案内を送りましたが、ハラスメント防止を各教会に徹底するという準備委員会の意図は達成できたと思います。参加者は、各教会に帰ってすぐにこの報告をし、教会でも研修の場をもってほしいという声も聞かれました。

今後、わたしたち準備委員会は、相談窓口を設けるための準備と研修、そして、ハラスメントについてみんなで考える場をたくさん設定していかなければなりません。そのためにも、全国の教区との連携ができればと願わずにはられません。

アジアの子どもたちの人身売買に関する聖公会協議会

金 善姫

(中部教区執事/松本聖十字教会副牧師)

11月2日から6日まで、「アジアの児童の人身売買に関する協議会」が香港で開かれました。この協議会に関して聖公会新聞(12月、1月)と管区だより(12月)に既に報告させていただきました。重なる内容は省略して、感想を中心に報告したいと思います。

参加した各国の代表者による現状の発表に続き、ECPAT と UNICEF の報告がありました。特にメコン川に接している中国、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムという6ヶ国の被害が一番ひどいという事でした。一人が一日に1ドル未満の生活を強いられている貧困が人身売買の大きな原因の一つです。

数人の教役者が参加していました。インドの主教は司祭の時も人身売買の現場で働いた方で、カナダの司祭は博士として人身売買研究所の責任者として働いています。そして、タイの司祭は人身売買の被害者である子どもたちの施設で働いている方でした。日本にも専門的な働きが出来る教役者を期待したいです。

特に、タイの牧師は右の絵を見せながら、一つの種が太陽と雨によって大きな木になり、実を結び、その木には鳥たち(命)が養われるという話をしながら、自分たちの共同体も小さな働きの中に愛が実り、多くの子どもたち(命)が養われると信じていると話をしてくれました。



人身売買によって莫大な利益を手に入れている闇の世界に私たちはどう働きかけられるのでしょうか。一人ではできなくても、「お金より人が大切」だと信じてもっと多くの人々に伝え、手を組み、協働していきたいです。

関心のある方々の参加を期待しています。そして、もっと日本の情報を聖公会のネットワークやNGOなどに伝えたいです。

今回、とても大切な経験が出来ました事に感謝します。主の平和！

女性デスクからのお知らせ

AWNからのニュース…フィリピン/フランチェスカさんからのお手紙

* 今年の夏、大きな台風が東南アジア各地を襲い多くの人が被害を受けました。IAWN(国際聖公会女性ネットワーク)のメーリングリストにも、9月にフィリピンのフランチェスカさんから現地の状況を知らせるメールが届きました。被災地では今もコミュニティの復興に向けた作業が続けられています。災害の犠牲者とコミュニティの回復のためにお祈りください。

なお管区事務所より11月号には、10月12~15日にフィリピンを現地視察された神崎雄二司祭(東京教区)の詳細な報告が掲載されています。こちらもぜひご覧ください。

2009年9月26日 土曜日

オンドイ台風によって、フィリピンの首都地域は多大な被害を受け、荒廃状態にあります。300,000近い人々が影響を受け、何千人もの人々が学校、教会、避難センターに避難しています。今日現在で、73人の死者が報告され、未だにマニラの地下街の泥水の中に取り残された遺体の捜査が、軍や救助隊の手が及ばないところで続けられています。グロリア・アロヨ フィリピン大統領は声明を発表し、「マニラ地下鉄は泥に埋まってしまった。オンドイ台風は一生に一度体験するかどうかと言う大規模の台風で、その雨量は対応の限界許容量を超えたが、最終的には私たちは崩壊には至らなかった。」と述べました。

国際的な名称はケツァーナとして知られるオンドイ台風(日本では台風16号・訳注)はこの地域を横切って荒れ狂い、1ヶ月の降水量に相当する雨を12時間の間に降らせました。

多くの住居は家財もろとも失われ、家庭はひどいダメージを受けました。フェアヴューにある我が家の近くでも、10件ほどの家が腰の高さまで浸水し、家財のほとんどが泥に浸かって修復不可能な状態です。他の地域でも、テレビでは軍や警察また民間ボランティアが何千という人々を救助している様子を伝え続けています。半分水没したバスや家の屋根にぐしょぬれになって取り残されている生存者を救助している惨憺たる様子や、泥に浸かった子どもの体を船から引き上げたり、近所で浸水した地域を捜査して見つけた二人の遺体を運び去る様子です。一番辛いのは、強烈な嵐によって自分の家でおぼれてしまった人々を見ることです。

すべてのものを失った住民も、生きているということだけで感謝しています。このような状態ですから、この台風によってもたらされた苦難のうちにある人々のためにともに祈ってください。家を失った人々、そうでなくても食べ物着るものの無い人々、特に愛する人を失った人々のために。そしてその人々が、主の恵みと希望、変わることの無い愛によって、再び立ち上がり、歩みだすことが出来ますようにと祈ってください。

フィリピン IAWN フランチェスカ (翻訳: 夏目和世)

■フィービー・グリズウォルドさんを囲んでミーティング

11月17日、管区事務所において、来日されたフィービー・グリズウォルドさんを囲んで、リグリマ、アルディナウペポ、バーン・サバイ共の会などNGOに関わっている方々や、これまで国連女性会議に参加された方などにお声をかけ小さなミーティングを持ちました。



撮影／吉松さち子

フィービーさんは、これまでアメリカ聖公会で女性のエンパワメント、UNC SW（国連女性の地位委員会）に参加する世界の聖公会女性たちの支援やネットワークづくり、MDGs（国連ミレニアム開発目標）への教会としての取り組みなどに関わってこられた方です。

お話の中でフィービーさんは、1998年に夫（キャサリン・ジェファーツ・ショーリ主教の一代前のグリズウォルド米国総裁主教）と一緒にエルサレム教区を訪問した時に、初めて現地の女性たちと直接出会うことで、その地で起こっている出来事をはっきりと知ることができたこと、そしてその時女性たちの語ったことは、帰国後ニューヨークで聞いた国連女性会議の場でさまざまに話される世界の課題ともつながっていることに気づき、この先進的な課題を扱う国連会議の場に世界の聖公会の女性たちを集め、つながりをつくり、課題を共有することが、問題解決に向けた前進につながっていくと確信し、その後のネットワークづくりに取り組まれた経緯をお話になりました。

会では、フィービーさんのお話を聞いた後、お昼をいただきながら、それぞれのNGOグループの取り組みや教会とのつながりにおける課題、また11月2～6日に香港聖公会で行われた子どもの人身売買・労働などに関する国際会議報告（金善姫執事）、これからの私たちのヴィジョン～特に東北アジアにおける女性たちのネットワークづくりなどについて意見交換が行われました。

短い時間でしたが、女性たちこそがこの世界を「お金」ではない新しい価値に向けて変えていく原動力となっていくのではないかと語るフィービーさんに励まされる思いがしました。

（報告 木川田）

■150年記念プログラムの中では、このような集まりも行いました！

■ジェファーツ・ショーリ主教を囲んで ティータイム・ミーティング

記念礼拝の前日、9月22日のひととき、女性の教役者、神学生ら約20名が集まってジェファーツ・ショーリ主教を囲んでの「ティータイム・ミーティング」が行われました。出席者からの質問に答える形で、現在のアメリカ聖公会の具体的な状況について話ししていただきました。以下は、お話の一部から。



・米国聖公会の女性の聖職について

現在、米国聖公会における現職の女性の司祭の割合は35%で、女性の主教の割合は10%以下です。神学生はほぼ半数が女性です。1975年に法憲法規が変わり、反対の教区においても、召命を受けたとする人は、性別、年齢、国籍などのいかなる差別も受けることなく、Discernment Process（召命を識別し確かなものとする過程）を踏めるようにすることが定められました。つまり按手への道が女性に閉ざされることがないようにになっています。また、それぞれの地域や文化においてさまざまな取組みがあつてよいと思いますが、米国聖公会では、パートタイム、またその半分の時間の就労など、多様な働き方ができるようになっています。中米諸国などでは、経済的な必要もあつて多数の女性が教会で働いています。ヒスパニックの人々の間では、母親が子どもに教え、信仰を伝えるという文化があるため、その伝統に女性の司祭の働きがうまく合致しているようです。みなさんは今たいへんな時を過ごしておられると思います。アメリカでも、およそ30年前、第一世代の時代には、男性のようになろうとして、男性に負けないようにアグレッシブにふるまうといったこともあつたでしょうが、今はそういうこともなくなりました。上意下達のようなリーダーシップだけがリーダーシップなのではなく、下から広く声を上げていくリーダーシップもあるということをお伝えしたいと思います。それこそイエスが示されたミニストリーの形なのではないでしょうか

（報告／吉谷かおる）

* より詳しい報告書を希望される方は女性デスクまでご連絡ください！ punku@mb.aikis.or.jp

■第1回女性団体連絡協議会

記念礼拝当日9月23日の午前、東京教区目白聖公会ホールに於いて初めての日本聖公会女性団体連絡協議会が開催されました。主催は管区女性デスクで、開催の目的は、日本聖公会に連なる女性の諸団体、グループが互いの働きについて分かち合い、日本聖公会としての課題を共有することでした。

参加は、日本聖公会婦人会、GFS、NCC女性委員会聖公会代表、聖公会女性フォーラム実行委員会、女性が教会を考える会、リグリマ（NGO）、女性の教役者、UNCSW出席者、ACWCJ、ハラメント防止についての担当者、女性デスク教区窓口、正義と平和委員会ジェンダープロジェクト、（教区によって）婦人会代表、女性デスクなど、関連団体やさまざまな働きをしているグループの代表など19名と傍聴者ら。



それぞれの会の立ち上げの経緯や経験、活動の特徴を紹介していただいた後、早昼の助六寿司を食べながら、意思決定機関での女性の割合を上げていくための方策やガイドライ

ンの問題などを全体で意識化していくために、具体的なアイデアを交換していこう、ついでには来年夏に予定されているプレ宣教協議会という機会を生かせないだろうか、などの意見が出ました。記念礼拝を控えたあわただしい会議で、また呼びかけができたのも全体の中のごく一部のグループということになりましたが、今後も少しずつつながりを広げながら、女性の課題についてともに考えていけたらと思いました。（報告/木川田道子）

ジェンダープロジェクトより

～クリスマスおめでとうございます。新しい年も神様の祝福がゆたかにありますように～
★8月に開催した「シリーズセクシュアル・マイノリティの声に聴く①わたしの瞳に映る風景～性同一性障がい者の声～」には、地元大阪教区のみなさまはじめ、多くのご参加をいただきありがとうございました。このとりくみを通して「声を聴く」とは・・・「共に歩む」とは・・・と多くのことを考えさせられました。そして、あらためて「すべての人が尊重されること」の大切さを実感した次第です。ジェンダープロジェクトは、はじめからの目的である「すべての人が尊重されるために」ということを見失わずに今後も活動を続けたいと思います。★また、6月に全国の教会、および現役の教役者対象に行った「セクシュアル・ハラスメントに関するアンケート」には、多くの方のご協力をいただきありがとうございました。来年5月に行われる総会への報告を目標に、アンケート集計を終え、これから管区人権担当者、女性デスクと共に課題を検討していきたいと思っています。そこから導きだされる課題に、教会に連なる一人ひとりの方が少しでも関心をもって関わってくださることを心から願っています。★11月に発行予定だった『タリタ・クム』13号ですが、発送作業の都合で12月となってしまいました。その分、内容も充実いたしましたので、じっくりとお読みください。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。『タリタ・クム』で用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することが女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。